

楽園工場

作…永高英雄

シアターTRIBE

「楽園工場」・登場人物表

トウサキ (35)
タカモク (38)
サカムケ ヒロシ (32)
アミコ (20)
カメナシ (28)
タチバナ (32)
スミタ ポエム (22)

グッチ
ちんてんめい
タロウ
ウイテイワ
モツテイ
ゆっけ井
としいとうとハッピー&ブリュ

東西に分かれて内戦に陥った「いつか」の日本。

東西陣営は、現在は休戦中である。

ここは双方の国境付近、中立地帯。お互いに国境を完全に接することなく中立地帯を設けて、そこを地雷原と鉄条網で取り囲んでしまった。

舞台は、森の中にある「丸誠（まるせい）漬物工場」の事務室。

事務室とは言っても、かなり荒れている様子。

中には、事務机と真ん中に折りたたみ机が2つ。椅子が6脚ほどある。

事務所奥の真ん中に「工場入口」と書かれた引き戸がある。

下手に二階への階段がある。

季節は夏。時間は夜中。

軍用機の音が彼方に聞こえている。

客席が暗転。

舞台は暗転したまま。

バキバキものすごい音。

B G M
()

()

明転

事務所の天井に大穴が開いている。
夏の日差しが窓から射している。

SE (蝉の声)

しばらくして、トウサキが二階からゆっくりと降りてくる。

あたりをうかがう様子。セーラー服のコスプレ衣装を着ている。

しばらく事務所の様子をうかがう。机とかを調べる。

そこへ突然、事務所上手出入口が開く。

タチバナが顔を突然出す。

トウサキを見つけるとすぐに引っ込む。

トウサキ、驚いて棒立ちになる。

そのまま動けないでいるが、少し扉に近づこうとした瞬間、タチバナ、再び顔を半分だけ出す。

トウサキ再び棒立ち。

タチバナ、引っ込む。

トウサキ、再び動こうとすると、またタチバナの顔が半分だけ出てくる。

トウサキ 「…なんですか？」

タチバナ 「…。」

トウサキ 「あの…ここのかたですか？」

タチバナ 「…。」

トウサキ 「あの…。」

タチバナ 「ムガール帝国！」

トウサキ 「え？」

タチバナ 「ムガール帝国！」

トウサキ 「あ？ む？」

タチバナ 「ムガール帝国の逆襲！」

トウサキ 「え？ え？ むが？」

タチバナ 「死ね！ 死ね！」

タチバナ、叫びながら引つ込む。

トウサキ 「・・・え？ ・・・え？ え？ なに？」

トウサキ、恐る恐る扉に近づいていく。そして扉から外を覗こうとした時、ポエム二階から下りてくる。

ポエム、女もののパジャマを着ている。

トウサキ、虚を突かれる。

トウサキ 「おわー！」

ポエム、その声に驚き、二階へ戻っていつてしまふ。

トウサキ、茫然としているが、ちよつと階段へ行こうとして、

その時、ポエムの顔だけが階段の上からのぞく。

ポエム 「あ？ あれ？」

トウサキ 「な、何でしょうか？」

ポエム 「あれですか…もう大丈夫な感じですか？」

トウサキ 「え？」

ポエム 「あれですか？ …もう、起きてもいい感じですか？」

トウサキ 「あ、え？ あ、まあ。」

ポエム 「あれですよ…昨日。あれですよ…。すごかったですよ。」

トウサキ 「え？」

ポエム 「音。」

トウサキ 「音？」

ポエム 「そう。音。すごかったですよ。ほら、ほら、これ。」

そういつてポエム階段を下りて、穴を指す。

トウサキ 「すごいですね…。」

ポエム 「なんか…人ごとみたいですね。」

トウサキ 「ああ、すみません、すみません。」

ポエム 「ほんとに、なんともないんですか？」

トウサキ 「そうみたいです。いちおう…あの (自分の着ているものを見る) 」

ポエム 「去年の忘年会の衣装です。それ。」

トウサキ 「忘年会？」

ポエム 「たまたま、うん、それしかなくて。似合いますよ。」

トウサキ 「…そうですか。」

ポエム 「セーラー戦士、極太アース。」

トウサキ 「セーラー？ ごくぶと？？」

ポエム 「ほらほら、アースロワイヤル・ミストレス・レッドの衣装。あれ？ 知りませんか？」

トウサキ

「…なんですか？それ？」

ポエム、アクションしだす。

ポエム

「セーラーロワイヤル・ホイップング・スペシャル！おしおきだよーこの豚野郎ービシッ
ー！ひー！ー！っていう。」

トウサキ

「そりゃ趣味のな〜」

ポエム

「…もういいです。」

トウサキ

「…すみません。」

しばらく沈黙の二人。

いたたまれなくなつてトウサキが話し出すと同時にポエムも話し出す。

トウサキ

「あの。」

ポエム

「あの。」

トウサキ

「あ、どうぞ。」

ポエム

「どうぞ。」

トウサキ

「いや、あのどうぞお先に。」

ポエム

「あ、僕、あのスミタ ポエムです。」

トウサキ

「スミタさん？」

ポエム

「ポエム。」

トウサキ

「スミタポエムさん。」

ポエム

「ああ、ポエムでいいです。」

トウサキ

「ポエムさん。」

ポエム

「はい。（トウサキの名前を聞いたそうに）ええと…」

トウサキ 「私、あの、トウサキと言います。」

ポエム 「トウサキさん。」

トウサキ 「はい。」

ポエム 「トウサキさんつと。」

トウサキ 「…はい…あの…。」

ポエム 「なんででしょう？」

トウサキ 「ここだなにをしてるんですか？」

ポエム 「え？」

トウサキ 「ここで。」

ポエム 「あ、あれですよ。ここは。漬物作ってるんです。」

トウサキ 「漬物？」

ポエム 「漬物工場。」

トウサキ 「…ええつと。ここあの、どこになるんですか？」

ポエム 「どこ？」

トウサキ 「あの、国境付近ですよね？東側ですか？ここ。」

ポエム 「ああ、あれですよ。どっちにも入らないです。」

トウサキ 「中立地帯ってことですか？」

ポエム 「そうです、そうです。中立地帯。」

トウサキ 「で、ここには他に？」

ポエム 「え？」

トウサキ 「他に誰かいるんでしょう？」

ポエム 「あ。います、います。」

トウサキ 「誰が？」

ポエム 「ああ、ここにはね、今、僕の他に5人いて、前は、もうちょっといたんだけど…いろいろあつて。」

ポエム、お茶を淹れながら話す。

ポエム 「一応、工場長っていうか、この責任者は、タカモクさんっていうおばさんなんですけど。」

トウサキ

「ほう。」

ポエム

「戦争前からの、唯一この正社員だった人で、工場勤務30年って言っていました。中学出てすぐに働き出したって。お茶碗をトウサキに渡す。どうぞ。」

トウサキ

「お茶を受け取ってすみません。」

ポエム

「でも、ほんとは一番上司っていうか上の人は、アミコさんなんです。」

トウサキ

「アミコさん？」

ポエム

「ヒガシカンザワ アミコって言う人なんですけど。丸誠漬物の常務さん。常務っていつても、あれですけど。先代の娘さんなんです。今年で20歳。ああ、僕は、戦争はじまる直前にここへきたんで。アルバイトです。あと、本社の営業のサカムケって人と、大学から、なんか菌の研究にきてそのままいついちゃったカメナシさんって人です。」

トウサキ

「そうですか。あれ？もう一人は？」

ポエム

「え？」

トウサキ

「さつきですね。あの、その扉からこっちを覗いてた人が……」

ポエム

「ああ、あの人は……」

ポエム言いかけた時、サカムケが階段から顔を出す。

サカムケ

「あー！」

サカムケ大声で言いながら下りてくる。

サカムケ

「なにになに！えー！もう大丈夫なの？」

トウサキ

「ああ、すみません。お騒がせしちゃって。」

サカムケ

「まじで？まじで？なんともない？」

トウサキ

「おかげさまで。」

サカムケ

「不死身？ おたく。」

トウサキ

「ちがいますね。」

トウサキ

「すごいなー。なあ、おい。（ポエムに）すごいよー。すごかったのよー、昨日は。」

ポエム

「あの、ヒロシさん、この人、トウサキさん。」

トウサキ

「どうも。」

サカムケ

「ああ、どうも、どうも。トウサキさん？ そうなんだ、そうなんだ。えーなにになに？もういろいろ話した？このこと？話した？」

ポエム

「いや、今話はじめたところで…。」

サカムケ

「（聞いてない）あ、そうなの。そうなの。ふーん。ふーん。お前さあ、呼んでたよー。二階でさあ。」

ポエム

「え？誰が？」

サカムケ

「ああ、タカモクさんかな？」

ポエム

「え？」

サカムケ

「お前、早く行ったほうがいいって。」

ポエム

「ああ、そうですか・・・じゃあ、（トウサキに）あのまたあとで。」

ポエム、慌てて二階に上がる。

サカムケ

「あいつなんか言った？」

トウサキ

「え？」

サカムケ 「いや、ほらあ、このことで。」

トウサキ 「いや、別に、あの、誰がいるとかかってことまでは。」

サカムケ 「誰が？誰が？誰が？誰が？」

トウサキ 「あ、いや、今いる方の。」

サカムケ 「あ、そう…。」

トウサキ 「なんかまずかったですか？」

サカムケ 「イヤ、まあ、あいつはおしゃべりだからよ。」

トウサキ 「（お茶を一杯飲んで）ああ、これはすごい。」

サカムケ 「え？どうした？どうした？」

トウサキ 「本物のお茶ですか？これ？」

サカムケ 「（ニヤニヤ笑いながら）おー。よくわかった、そうなんよー。」

トウサキ 「すごい久しぶりですよ。本物のお茶なんて。」

サカムケ 「だろー。まあ、ここにいりゃだいたいのもんは手に入るから。」

トウサキ 「そうなんですか？」

サカムケ 「そう。トウサキさんは、どっちから。」

トウサキ 「西です。」

サカムケ 「そう、西側から。へー。で、なんでここへ？」

トウサキ 「え？」

サカムケ 「ほら、落下傘で。」

トウサキ 「ああ、落下傘で降りてきたんですか？」

サカムケ 「覚えてない？」

トウサキ 「全然。…突然飛行機が、ドカンって。ああ、私、あの輸送機で香港から…あの、葉運んでたんですよ。赤十字の。」

サカムケ 「お医者さん？」

トウサキ 「ちがいます。医者じゃあないんです、まあ、ある種の薬品を、海外から。」

サカムケ

「ああ、薬屋さん？」

トウサキ

「まあそんなようなもんで。」

サカムケ

「薬屋さんがまたなんで？」

トウサキ

「東側に、医療支援ってことで、国際輸送便で。」

サカムケ

「医療支援？」

トウサキ

「西側でもそうなんですけど、東側でちょっとした病気がはやってまして。」

サカムケ

「へえ、ああそうなの。」

トウサキ

「でその薬を向こうの担当者に、まあ直接引き渡させてことで、私が。ちょっといやだったんですけどね。」

サカムケ

「あっちはね。独裁政権だからね。やだよね。」

トウサキ

「まあ・・・、で到着夜中だから、寝てたんですよ。」

サカムケ

「そうなの。」

トウサキ

「そしたらいきなりドカンと。」

サカムケ

「おーおー。そりゃまあ大変だ。」

トウサキ

「あれ、ミサイルじゃないかな？いきなり爆発して。で、気が付いたら。」

サカムケ

「死んでたね。あやうくね。」

トウサキ

「ですかね。」

サカムケ

「そうだよー。死んでた確実。死んでた。」

トウサキ

「ですか。」

サカムケ

「よかったよー。落ちたところがここで。」

トウサキ

「そうですか？」

サカムケ

「そうだよー。ここいいとこだよー。ここ。うん。ま、どこにもいけないけどね。」

トウサキ

「どこにも？」

サカムケ

「そうだよ。」

トウサキ

「どこにもいけない？」

サカムケ 「いけない。」

トウサキ 「私、あの西側の人間なんで、そっちの国境こえて・・・」

サカムケ 「だめだめ、誰も国境こえらんないから。」

トウサキ 「そんな嚴重ですか？」

サカムケ 「ほら、ここ、中立地帯になってるんだわ。」

トウサキ 「それ聞きました、さつき。」

サカムケ 「そう？でよー、ほらどっち側もここから2キロくらいのとこを非武装地帯ってことにしてよ。地雷原なんよ。」

トウサキ 「地雷原・・・。」

サカムケ 「でよ、でよ、鉄条網とき、監視塔みたいなのがぶったててよー。近づくやつは見境なく。ドババババババよ。」

トウサキ 「・・・ここは、じゃあ、孤立してるんですか？」

サカムケ 「そうよ。完全に孤立。どっちにもいけないのよ。」

トウサキ 「・・・。」

サカムケ 「そうなんよ。へへへへ。孤立。孤立。小さいリスなんつってな。ははは、あつそれは小リス！ あははははは。バカ受け！ はははは。」

トウサキ 「どうやって？」

サカムケ 「うん？」

トウサキ 「どうやって、食ってるんですか？」

サカムケ 「へへへへ、不思議でしょ？」

トウサキ 「不思議です。」

サカムケ 「粉よ。」

トウサキ 「粉？」

サカムケ 「そう。粉。」

トウサキ 「なんの？」

サカムケ 「あ、いきなり直球きちやう？ ビシッと。」

トウサキ 「秘密なんですか？」

サカムケ 「まあ、秘密ってほどのもんじゃないけどよ。一応、ほらノウハウ？」

トウサキ 「・・・なるほど。」

サカムケ、ポケットから粉の袋を出す。

サカムケ 「じゃーん。」

トウサキ 「なんですか？」

サカムケ 「この工場の裏によ、変な木があつてよ。その実の中に種があんのよ。その種を砕いて、粉にしてんのよ。」

トウサキ 「木の実の種。」

サカムケ 「そうそう。」

サカムケ、粉の袋を渡す。

サカムケ 「こいつがよ、高く売れんのよ。」

トウサキ 「へー。」

サカムケ 「地雷原にはよ、通り道があんのよ、秘密の。でよ、国境の鉄条網ごしに向こうの兵隊とやり取りすんのよ。」

トウサキ 「どっちの？」

サカムケ 「両方よ、両方。」

トウサキ 「ああ。」

そっぴいなながらトウサキ、なにげなく袋を開け始める。

サカムケ、それを見ていない。

サカムケ 「二見、なにげなーい粉なんだけだよ。実はよ、こいつにはよ、すっごい秘密があつてよ
…」

トウサキ 「へー」

トウサキ、粉を吸いこむ。

サカムケ 「ああ、だめだつてー吸っちゃー！」

トウサキ、ぶっ倒れる。

急速に暗転

事務所の真中にあつた折りたたみ机といすが隅に片付けられている。
タカモクが前にいて元気よく体操している。

カメナシ、ポエム、サカムケ、3人が体操している。

SE (ラジオ体操第一)

「〜今日も一日元気で過ごしましょう。」

終了と同時に、扉から、アミコが飛び込んでくる。

アミコ 「すみません！ 終わっちゃいました？」

カメナシ 「おそーい。おそーい。おそーい。」

アミコ 「すみません。あの。」

カメナシ 「二日連続だわ。遅刻。二日連続！」

アミコ 「だから、すみませんって・・・。」

カメナシ 「(うれしそう) これどうします？ タカモクさん？ どうします？」

タカモク 「アミコちゃん、どういうこと？ 朝礼に遅刻とかって？ うん？」

アミコ 「いや、ちがうですよ。今日は。」

タカモク 「もしかしてさ、朝礼の大事さがさ、わかってないんじゃないかなあ。ねえ？」

カメナシ 「わかってないと思いますよお。全く！」

タカモク

「朝礼をさぼるってことは、規律を乱してもかまわないっていうことじゃない？ 規律を乱してもかまわない、つまり仲間を裏切ってもかまわないと、仲間を見殺しにしてもいいと、そう思ってるんだね？」

アミコ

「そうじゃないです。」

カメナシ

「これは、大問題だわ。ねえ？ (ポエムに)」

ポエム

「だ、大問題だと思います。」

カメナシ

「調子、乗ってんじゃないすかあ？ なんか、会社幹部とか言ってる。そういう空気感よお。ですよ。」

アミコ

「ちがいます。そんな空気感はないです。ちがいます。」

タカモク

「ねえ、アミコちゃんさあ。私はさあ、あなたのオシメ替えてやってたころから知ってるけど。そろそろ学生気分っていうかさ、そういうのはあれしなきゃね？」

アミコ

「わかってます。それはもうわかっています。」

カメナシ

「じゃあ、なんで朝礼遅れてんですか？」

アミコ

「だから、あのすみませんでした。ちょっと寝過して……。」

タカモク

「寝過したー？」

カメナシ

「出たよ！ 出た、出た。」

アミコ

「すみませんでした。」

サカムケ

「あの、もういいじゃないすか？ そのくらいで。」

カメナシ

「はあ？ よくないでしょ？ ぜんぜん、よくないでしょ？」

タカモク

「私もよくないと思う。でしょ？ (ポエムに向かって)」

ポエム

「よくないです！ 非常によくない！」

タカモク

「規律っていうのはさ、一旦綻んだらね。もう取り返しがつかないっていうか。もうしつちやか、めっちゃかになっちゃうもんなの。でしょ？」

ポエム

「ですね！」

カメナシ

「じゃあさ、明日、遅刻したら、罰則ってことにしたらどうですか？ なんかの。(タカモクに)」

「え？罰って？なんのですか？」

「ちよつと、そういうの止めましょうよ。」

「だってしょうがないでしょ？そうしないと規律、保てないんだから。」

「だからって、そういうの、ちよつとあれじゃないですか？」

「あれ？サカムケさんは、規律はどうなってもいいと？」

「いやそういうんじゃないけどさ。」

「もう、ほんとに、しませんから。」

「これ、避けて通れないっしょ？ねえ、タカモクさん。」

「そうね。そうせざる負えないかなあ。」

「いやいや、ちよとさあ。やめようって。もう。」

「ポエムさんもそうでしょ？これ？」

「まあ、しかたないんじゃないですかあ？」

「ほらあ。これ普通ですよ、この意見があ。結論だしちやいましようよ。ねえ。タカモクさん。サクツと。」

「じゃあ、そうしましょう。明日、アミコちゃんが朝礼に遅刻したら、罰則を与えることにします。」

カメナシ、力強く拍手する。ポエムも拍手。

しかたなくサカムケ拍手。

「ハイ、じゃあ満場一致ってことで。」

「・・・わかりました。」

「えーとサカムケさん、それでそのトウサキさんって方ですけども、意識が戻ったら、私に知らせてください。」

「あーはい。」

タカモク 「この規律とか、いろいろつたえなきやね。そういうことは責任者の仕事だから。」

サカムケ 「はい。すんません。」

タカモク 「じゃあアミコちゃん、この片付けと袋詰め準備。いいかな？」

アミコ 「はい。」

タカモク 「はいそれぞれ作業の準備。10分後からふくろ詰め作業開始。はい、朝礼終わり。」

他全員 「今日も一日。安全に！」

タカモクとカメナシは工場入口の扉から出ていく。

サカムケ二階に去る。

アミコだけが残って、机といすを戻したりして袋詰め準備を始める。

ポエム、いったん工場入口から出かけるが、再び戻ってきてアミコを手伝う。

ポエム 「あ、手伝いますよ。僕。」

アミコ 「あ、ごめんなさい。」

ポエム 「全然、いいですよー。これぐらいー。」

アミコ 「ありがとう。」

二人、朝礼の片付けをしながら

ポエム 「あれですよ。最近。」

アミコ 「え？」

ポエム 「タカモクさん。」

アミコ 「タカモクさん？」

ポエム 「なんか、あれですよ。ちょっと頭に乗ってるっていうか。」

「なにが？」

「あれ？アミコさん、そう思わないっすか？」

「それは、思うけど。」

「あれ、いいんですか？だって事実上の上司はアミコさんでしょ？」

「まあそりゃ…。」

「なんかさ、ここんとこ、ますますいばり始めてるでしょ？タカモクさん。そう思いませんか？」

「それはそうかもしれないけどさ。」

「それに、カメナシさん。もうすっかり太鼓持ちじゃないすか？なんすか？ あれは？」

「さあ……。いいんじゃない。」

「ここはさ、一発ガツンと…。」

「あのですね。」

「あーんですか？」

「手伝ってもらって、こんなこと言うのもあれんですけど…。」

「なんででしょう？」

「ないから。」

「え？」

「私、あのそういう感情っていうのかな…ないんで。あなたに対して。」

「…え？え？…え？」

「あ、ごめん。ほんとごめんなさい。」

ポエム、ものすごいショックを受けているがなんとか持ちこたえている。

「あれですよ…それは…あれっというか…。」

アミコ 「ほんとに、ほんとにごめんなさい。もちろん他に誰か好きって言うことでもないし、あれ
なんだけど……」

ポエム 「……いやあ……だなあ！そんなことじゃないですよ！僕は。そんな感情はないですよ。ほんと
に。まじで、まじで。」

アミコ 「え？え？え？」

ポエム 「いやいやいや、まじで。まじでない。ないな。それはないです。ハッキリ言って。」

アミコ 「え？あ、そうなんだ。えーなに？じゃあ私の誤解？」

ポエム 「そうそうそう、誤解。」

アミコ 「あ、そうなんだ。……ごめん！ごめんなさい。ほんとに。なんか。あー恥ずかしい。
なに？えーなんか勝手に早合点しちゃった。もう。」

ポエム 「ああ、もう全然気にしないでくださいよ。ああ。もう。」

アミコ 「すみません。ほんと。すみません。」

ポエム 「いやいや気にしないでくださいよ。もうあははは。」

アミコ 「なんか私あれですね、なんかバカみたいですね。一人で妄想してるみたいで。」

ポエム 「いやいや、いいんじゃないですかあ？こういう時ですから。うんうん。」

ポエム、しばらく考える。

ポエム 「あれですかあ。」

アミコ 「え？」

ポエム 「仮にですよ。仮に。自分があ、こう、アミコさんのことをですよ……」

アミコ 「ない。」

ポエム 「あ、ない……」

アミコ 「ない。」

ポエム 「ああ、ね、ですね。」

「そう、ない。」

「ああ、・・・なるほど、なるほどねえ。うん・・・しかしですよ、こう、パーセント的に見ていけばですよ。」

「ゼロ。」

「あ、ゼロ？」

「そうゼロ、ナッシング。」

「あ、ゼロパーね。うん。うん。なるほどなあ。そうきちやうかあ。うんうん。そうなんだよねえ。」

ポエムしばらく考え込むが、突然。

「あれですかねえ、なんかいたらないんですか？ 自分は。そういうことですかねえ。どうなんですか？そこらへんのところは。どうなっちゃってるんですかね？」

「あ、いや。ポエムさんが嫌いって言うんじゃない。・・・その・・・私、あれなのね。割と男らしい人がいいと思ってるのね。」

「男らしい・・・。」

「そうそう。男らしい感じで・・・ちよつと古風？」

「えー！」

「あれ？ そんなにびつくりしちゃう？」

「いやいや、そういうことじゃなくて・・・。それは、僕は男らしくないってそういうことでしょうか？」

「でしょ？」

「あれ？そうですかあ？ 僕、男らしくないですかあ？」

「ないでしょ？ 全然それはないでしょ？（笑い）どっちかって言うと卑劣。」

「ひれ・・・えー？えー？おかしいなあ？ありますよ。僕は、そこらへんは、かえってありますよ。いやひるがえって、ありでしょう？」

アミコ 「じゃあさあ、直接言っちゃおう？ タカモクさんにさ。」
ポエム 「え？え？なにをですか？」
アミコ 「さっきの、ほら、最近、おかしいとか、いばってるって話。」
ポエム 「あれ？あれ？あれ？」
アミコ 「直接言わないでしょ？」
ポエム 「え？ え？」
アミコ 「そこらへんからさあ。もう卑劣感満載。」
ポエム 「ちよつと待ってください。」
アミコ 「全然いいから。別にポエムさんにそんなこと期待してないし。」
ポエム 「ちよつと待ってくださいよ。」
アミコ 「だからもういいって。」
ポエム 「言いますよ！」
アミコ 「え？」
ポエム 「言ってしまうですよ。僕が。くつきり、はつきりと。」
アミコ 「まじで？」
ポエム 「やるときはねえ・・・やる男ですよ。」
アミコ 「まずくない？そんな・・・」
ポエム 「ガツンとですね！言っちゃいますよ。」
アミコ 「ガツンと？」
ポエム 「ガツンと！そもそもここ「丸誠漬物」は、アミコさんが次ぐべき会社なんだから。」
アミコ 「あっそう思う？そう思う？やっぱ。」
ポエム 「そうですね！やりますよ！僕は。ガツンと！まかしてくださいよ。」

そこへタカモクが戻ってくる。

ポエム、びつくりして立ちつくす。

タカモク 「(ポエムの様子を見て) なに？」

ポエム、ちらちらとアミコをちら見する。

タカモク 「なに？ なに？」

ポエム 「え？・・・いや別に。」

アミコ、えー！と言う顔。

タカモク 「さっき言い忘れたの。今夜、集会開きますので、全員出席で。新しい人が増えたんだからその辺のこと。ね。」

ポエム 「あ、はい。」

ポエム 「そういうことで。」

アミコ、ポエムを呆れたように見ている。

ポエム、その視線を感じて。

ポエム 「あの！」

タカモク 「ああ、あれだわ。」

二人がかぶってしまふ。

タカモク 「なに？」

ポエム 「あれですよ・・・あの、サカムケさんには、僕から言っておきますよ。」

タカモク 「ああ、そう？　じゃあ、よろしく。」

ポエム 「いえいえ。」

タカモク 「なんか最近あれだね、ポエム君も、だんだん人間ができてきたね。うん。」

ポエム 「そうすか？」

タカモク 「うん。全然前と比べて。すごく大人。うん。誰かとちがって。あはははは。」

ポエム 「ですかあ・・・ですかねえ、自分では、そうでもないんですよ。アハア、アハア、アハア。」

ポエム、バカ笑い。

タカモク行ってしまう。

アミコ、ポエムを無視して、袋詰めの作業準備をしている。

ポエムも、何事もなかったように準備を手伝う。

ポエム 「・・・（圧着機を持ちながら）えーと、これはここでいいですかねえ。」

アミコ 「ああ、そこに置いといてもらえば・・・。」

ポエム 「あ、はい。」

もくもくと作業準備が終わる。

ポエム 「あ、じゃあいいですかね？　こんなところでね。」

アミコ 「ありがとうございます。」

ポエム 「はい。いえ。もう全然ですから。」

アミコ、椅子に座って、粉の詰まった袋を圧着し始める。

ポエム 「今夜、やりますよ。」

アミコ 「だから、もう、いいって、それは。」

ポエム 「いやいやいや、いやいやいやいやいや。ちがうですよ、聞いてくださいよ。」

アミコ 「なにを？さっきのあれはなんなわけ？」

ポエム 「いやだから、あれは・・・今夜への布石でしょう？」

アミコ 「は？」

ポエム 「だから・・・あれですよ。一種のカモフラージュですよ。」

アミコ 「え？」

ポエム 「そうか・・・そうか・・・それだ。それしかないわ。完全にわかりました。今夜の集会で、リーダー交代の動議を出すんですよ。」

アミコ 「出すんですよって・・・誰が？」

ポエム 「アミコさんが。」

アミコ 「え？ 私が？」

ポエム 「そうなんですよ。そこなんですよ。」

アミコ 「え？え？え？なんで私が？」

ポエム 「だからあ、アミコさんがリーダー交代の動議を出せばすねえ、絶対にヒロシさんも賛成しますよ。あの人も反体制派ですからね。そうすれば、賛成者は、僕と、アミコさんと、ヒロシさんの三人です。あつちは、どう転んでも、タカモクさんと手下のカメナシさんしかないわけだから。まあもう一人いるけど、あの人は、そもそも、除外だし。そう！勝ちですよ、こっちの。」

アミコ 「ちよつと、なに言ってるの？ちよつと、勝手に何作ってるわけ？」

ポエム 「そうですね。そう、これしかありませんよ。あの人の圧政がこれ以上つづかないようにするためにこれしかない。うん。やってくれますよね。そもそもアミコさんが乗り気になってくれなきゃ、こんなクーデター、成功しないんで。」

アミコ 「なんで、私が？ あなたがやってくれば・・・」

ポエム 「もう事態は、動き始めてしまったんです！」

アミコ 「ええええ？」

ポエム 「そうです。もう引き返せない。・・・時代の奔流が、今夜、濁流となって我々を飲み込み始めてる。」

アミコ 「濁流って・・・濁流ってなに？それ？」

ポエム 「濁流とは！ダクダクした流れのことですよ！」

アミコ 「そういうこと言っただけじゃなくて。」

ポエム 「圧政に苦しむみんなの気持ちをこのままにしといていいんですか？」

アミコ 「そういうことじゃなくてさ・・・。」

ポエム 「トゥナイト！！人民の反逆の歴史がカミングスーン・・・」

ポエム、アミコの手を握りしめる。

その時、工場入口から、カメナシが顔を出す。

カメナシ 「なにしてんすか？」

ポエム 「ああ、ちよつと。」

カメナシ 「始めますからね。作業。」

ポエム 「（カメナシに）ごめんなさい。ごめんなさい。すぐに行きます。（アミコに）じゃあ、今夜。」

カメナシ 「なに話してんすか？」

ポエム 「いや別に。いいじゃないですか？ 仕事、先に始めててもらっても。ボタン押すだけじゃないすか？」

カメナシ 「そうはいかないでしょうが・・・。」

二人、いろいろ話ながら工場入口の扉から去る。

その直後、サカムケが二階からおりてくる。

アミコ 「どうです？」

サカムケ 「だいぶ落ち着いた感じだけどね。」

アミコ 「そうですか。・・・（ため息）」

サカムケ 「どうした？ またなんか言われた？」

アミコ 「うん、いやそうじゃないけど。」

サカムケ 「もう、変だよ。ここんときさ。だいたい朝礼なんて、やってなかったくせによ。戦争前はよ。なんかあれだね、おかしくなってるよね。あのひとたち。」

アミコ 「・・・ああ、そのことなんですけど・・・。」

サカムケ 「なに？」

アミコ 「あの、今夜、集会やるって・・・。」

サカムケ 「ああ、また？ もう勘弁してほしいな。」

アミコ 「そこで、動議を出すって。」

サカムケ 「何の？」

アミコ 「リーダーを、タカモクさんから私に交代するっていう動議を。」

サカムケ 「え？ 誰が？」

アミコ 「ええっと、それが、ちょっとおかしくて。・・・私が。」

サカムケ 「え？ 自分が？」

アミコ 「ああ、私がい出したんじゃないやなくて。その、ポエムさん・・・。」

サカムケ 「え？ あのあいつが？ 意味わかんねえけど？」

アミコ 「それが、あの人も、実は、タカモクさんに頭にきてるって。」

サカムケ 「うそだよ！」

アミコ 「でも、どうも本気らしくて。」

サカムケ 「まじで？」

アミコ 「ボエムさん、その動議が出れば、必ず、サカムケさんも賛同するから、私が勝つて言うて。」

サカムケ 「・・・。」

アミコ 「どう思いますか？」

サカムケ 「え？どうって？」

アミコ 「動議出すって話。」

サカムケ 「まあまあ、いいんじゃない。」

アミコ 「え？本気で言ってますか？」

サカムケ 「え？どして？」

アミコ 「え？だって。これ、ちょっと大変な感じの事だし。」

サカムケ 「でもよ、だいたいだよ、元からの上司は、あなたであるわけだし。ま、それが、たまたま、こうなっちゃったって、だけあって・・・。」

アミコ 「あああああうざい！」

サカムケ 「え？なに？」

アミコ 「なんかそういう流れるなんじゃ、すごくまずいと思うなあ、私。」

サカムケ 「あ、そう？」

アミコ 「まずいですよ。」

サカムケ 「まずい？」

アミコ 「なんか、もつと。こう。」

サカムケ 「もつと？」

アミコ 「もつと、攻めの姿勢が大切かなあ、って思いますよ。」

サカムケ 「あ、そう。攻めの・・・。」

アミコ 「そうです。」

サカムケ 「姿勢。」

アミコ 「そうです。」

サカムケ 「なるほど。」

アミコ 「サカムケさん、このままでいいと思ってます？」

サカムケ 「・・・まあ、ね。」

アミコ 「でしょ？」

サカムケ 「うん。」

アミコ 「まずいですよね？」

サカムケ、 「そうね・・・うん。」

アミコ 「もう！ はっきり言って下さいよ！ はっきりと！」

サカムケ 「まずい。」

アミコ 「そうです。だから、私、ちょっと真剣に考えたんですね。」

サカムケ 「え？」

アミコ 「圧政に苦しむみんなの気持ちを考えたなら、このままじゃいけないって。」

サカムケ 「ああ。」

アミコ 「もう時代の奔流は、濁流化していると思うんです。ハッキリ言って。」

サカムケ 「濁流・・・濁流？」

アミコ 「濁流ですよ。濁流！ だくだくした流れ。」

サカムケ 「なるほど・・・。」

アミコ 「賛成してくれます？」

サカムケ 「ええーと、なにに？」

アミコ 「打倒、タカモク政権。」

サカムケ 「もう全然。」

アミコ 「もう全然？ もう全然？」

サカムケ 「全然オーケーです。」

アミコ 「ホントに？」

サカムケ

「もう全然。そういうことなら。」

アミコ

「ああ、よかった。サカムケさんが賛同してくればもう大丈夫だ。」

サカムケ

「そうですか。」

アミコ

「そうですよ。だって3対2だもん。」

サカムケ

「たしかに。」

アミコ

「圧勝しよ。」

サカムケ

「ん？」

アミコ

「圧勝、圧勝。」

サカムケ

「えーと、ちよつと待つてよ。でもよ、今こっちは、俺とよ、アミコさんとポエム君でしょ？向こうは……。」

アミコ

「タカモクさんとカメナシさんの二人だから……。」

サカムケ

「いやいや、後1人いるじゃん。」

アミコ

「だって、タチバナさんは……。」

サカムケ

「ちがうって、彼女じゃなくて、ほら。」

アミコ

「あ！」

二人が階段の方を向くと、そこにトウサキが、Tシャツと半ズボン姿で降りてくる。

半ズボンがかなり大きいのでひっぱりあげながら。

トウサキ

「あ、すみません。ちよつとこのズボン大きくて。」

アミコ

「……そういうことか。」

トウサキ

「あ、あの私、トウサキです。ずいぶんご迷惑かけちゃってます。」

アミコ

「いえ、あの、ああ、私、ヒガシカンザワ・アミコと言います。」

トウサキ

「あ、あれですね、ここの常務さんですね。」

アミコ 「あ、そうです。あのそういうことです。」

トウサキ 「ほんとにすみません。なんか、いろいろと。」

アミコ 「いえ、あのいいんですけど。」

サカムケ 「どう？ 調子は？」

トウサキ 「ああ、ちよつと、まだ、ふらつく感じですか。」

サカムケ 「だろうね。」

トウサキ 「MSDですね。これ。」

サカムケ 「え？」

アミコ 「え？」

二人、超驚く。

トウサキ 「なるほど、こんなところで作ってたんですか。わかんないはずだわ。」

サカムケ 「えーと……。」

トウサキ 「ああ、薬扱ってるって、言いましたでしょ？ 僕。」

サカムケ 「これ、なんだか？」

トウサキ 「わかりました。すぐに。幻覚剤、MSD。」

アミコ 「……やったことあるの？」

トウサキ 「まさか。危険性は十分知ってますから。」

サカムケ 「あ、危険なの？」

トウサキ 「幻覚作用の強しさは、今まで知られてる最強の幻覚剤の30倍ですよ。しかも中毒性がある。知らなかったんですか？」

サカムケ 「まあ。」

トウサキ 「自分たちで作ってた？」

アミコ 「ここにいる人には、効かないから。」

トウサキ

「え？効かないって？ どういうことですか？」

アミコ

「効かないんです。私たちには。」

サカムケ

「ああ、ほら、木の実の種砕いたのって言ったでしょ？」

トウサキ

「はい。」

サカムケ

「最初は、その木の実の皮を漬物にしてたんだわ。白菜とか、材料無くなっちゃったからよ。漬物の。」

トウサキ

「はい。」

サカムケ

「でよ、その皮の漬物食べてたんだわ。他に喰うもんもないしね。で、そうこうしてるうちに種を砕いて、粉末にしたらってことになってね。」

トウサキ

「は、なるほど。」

サカムケ

「そしたら、・・・これが、バカ売れ。」

トウサキ

「でしょうね・・・。」

サカムケ

「ところがよ、自分たちには一向に効かないんだわ。いくら吸ってもね。」

トウサキ

「皮の漬物か・・・。」

サカムケ

「そうそう。皮の漬物を食ってたせいじゃないかってことになってよ。」

トウサキ

「なるほど、抗体ができたのか・・・皮の漬物で・・・それは・・・偶然にしても、危なかったですね。」

アミコ

「そんなに、危なかったんですか？」

トウサキ

「まあ。」

サカムケ

「そうなの？ いや、ほら・・・俺たちは、全然わかんないからよ・・・うん。」

トウサキ

「ですよね。」

アミコ

「どう・・・思いますか？トウサキさん。」

トウサキ

「え？」

アミコ

「私たちのこと・・・。」

トウサキ

「何を？」

サカムケ

「だから・粉よ。粉。こいつのせいで、あれでしょ？」

アミコ

「被害とか・・・でてるんですよね？ やつぱり。」

トウサキ

「まあ。」

サカムケ

「ああ、やつぱね。だよね。」

アミコ

「ひどいのかな？ かなり。」

トウサキ

「ひどいです・・・ね。」

アミコ

「どうすればいいと思いますか？」

トウサキ

「え？ どうすればとは？」

サカムケ

「だから・俺たちはよ、もうここから出られんよ。たぶん一生。で、粉があるから生きてこれたわけね。あらゆるもんが粉のおかげっちゃあ、おかげなわけよ。ほら、電気だつてさ、自家発電だからさ、油がいるしさ。水だつて、ほら、ここは地下水だけど組み上げにポンプ動かしてるわけね。それもガソリンいるでしょ？ もちろん漬物以外の食いもんは全部、粉と交換だしさ。あらゆるもんが粉と引き換えなわけよ。だからさ、今さら粉作るな」と言われてもさ・・・」

トウサキ

「いいんじゃないですか？」

サカムケ

「え？」

アミコ

「なにが？」

トウサキ

「いいと思いますよ。粉作るの。」

アミコ

「え？ 止めるとか、言わない？」

トウサキ

「言いませんよ、そんなこと。僕だって、出て行かれない以上はここで暮さなきゃならないんですよ？」

サカムケ

「そうだね。」

トウサキ

「そうでしょ？ いるんですか？ 反対してる人が？」

サカムケ

「いや、まあ、今はいないけどね。」

トウサキ

「合理的に考えれば、今の世の中で、一番の売れ筋を抑えてるってことですよ。我々が。」

アミコ

「我々・・・」

トウサキ 「とにかく、今までどりにやっつけていくことに僕はなんの異存もないですよ。」

サカムケ 「ああ、よかった!!!」

トウサキ 「何ですか？」

サカムケ 「いやあ、なんかさあ、いるでしょ？よく、こう変な正義感っていうの？ そういう振りかざしちゃう人。そういうんじゃないよ。トウサキさんが。」

トウサキ 「普通でしょ？ そんなおかしい人間じゃないですよ。・・・自己責任でしょ？」

サカムケ 「え？事故？」

トウサキ 「知ってて使ってたから。当人の責任ですよ。」

アミコ 「そうか！」

サカムケ 「そうだよねえ！そうだよ。」

トウサキ 「我々には、責任はないと思いますよ。もわと言わちやうと、こんな圍境勝手に引いて、はらみ合ってる、そんな上の奴らのせいでしょう。」

アミコ 「そうだよ。」

サカムケ 「まあ、仕方ないっしょ。生きてくためだからね。これは。」

トウサキ 「今まで同様で。」

サカムケ 「うーん。それがね。」

トウサキ 「なんですか？」

サカムケ 「その同様ってわけにいかなくなりそうなんだわ。」

トウサキ 「え？どういことですか？」

その時、工場の方から声がする。

サカムケ 「ちよつと、ちよつとこつち来て。」

サカムケ、トウサキを引っ張って。階段を上って去る。

B 暗
G 転
M
(

)

明転

BGM OFF

夜の照明

机が真ん中にある。会議形式。

ポエムはすでに所定の席についている。そこにアミコが二階から下りてくる。

ポエム

「遅いですよね。」

アミコ

「え？」

ポエム

「イヤ、みんな。」

アミコ

「ああ、だねえ。コマネチだよー。(アドリブ)」

ポエム

「なに言ってるんですか？緊張してるんすか？……あれですよ。」

アミコ

「え？なに？」

ポエム

「(小声で)大丈夫ですから。」

アミコ

「うん。」

ポエム

「バツチリ言っちゃって下さい。」

アミコ

「え？」

ポエム

「期待してるんで。」

アミコ

「……うん。」

そこに、カメナシが1人で入ってくる。

カメナシ

「あれ？まだこれだけ？新しく来た人は？」

ポエム 「ああ、今しがたトイレ行ったみたいですよ。」

カメナシ 「トイレ？」

ポエム 「なんか腹壊したみたいで。」

カメナシ 「いきなりの環境変化でお腹がついてこれなかったかな。ひひひ」

アミコ 「(小声で)笑い下品。」

カメナシ 「で、サカムケ氏は？まさか連れウンとか？」

ポエム 「さあ、知りませんけど。」

アミコ 「すぐ来ると思いますよ。」

カメナシ 「なんだよ。けしからんなあ。全く。これじゃまた司会者の僕が怒られるでしょうが。」

そこにトウサキとサカムケが扉から入ってくる。

サカムケ 「ああ、お集まりで。」

カメナシ 「遅いデスよ。」

サカムケ 「いやあ、だってまだあれでしょ？ 始まってないでしょ？」

カメナシ 「そういう問題じゃないでしょ？ 規律の弛みに関して、全体で綱紀肅正が求められてる時なんじゃない？」

トウサキ 「すみません。」

カメナシ 「ほんとに。頼みますよ。」

トウサキ 「はい。」

カメナシ 「サカムケさんも。」

サカムケ 「はいはい。」

カメナシ 「じゃあこれで全員揃いましたね。」

サカムケ 「え？ タカモクさんは？」

カメナシ 「(無視して) じゃあ集会始めます。」

全員なんとなく、頭を下げたりする。

カメナシ

「それでは、まず本丸誠漬物工場責任者！タカモクさん登場！はい。みんな拍手！」

カメナシ、ラジカセのスイッチを入れる。

BGM（スターウォーズ ダースベイダーのテーマ）

全員まばらな拍手

サカムケ

「なにこれ？」

アミコ

「仕方ないですから、今は。」

サカムケ

「もうめちやくちや。」

おずおずとタカモクが工場入口から入ってくる。

タカモク

「ちょっと・音楽合わないんじゃない？」

カメナシ

「バツチリっすよー！」

タカモク

「あ、そう？」

カメナシ

「全員揃ってます。」

タカモク

「始めてください。」

カメナシ

「はい。それでは、集会をはじめます。本日の議題は、新しくこの工場にやってきた、トウサキさんのご紹介と役割分担についてであります。じゃあ、トウサキさん。」

トウサキ

「はい？」

カメナシ

「自己紹介を。」

トウサキ

「あ、はい。」

トウサキ、立ち上がる。

トウサキ

「えー、あのトウサキと申します。みなさんどうぞよろしくお願いいたします。」

全員拍手。

カメナシ

「えーと・・・それだけ？」

トウサキ

「あ、それじゃあ・・・えー、落下傘でやってまいりましたトウサキと申します。朝からいろいろとお騒がせしちゃったみたいですが、あの、なんとかこの環境に慣れて、いきたいと思っておりますので、あの、ご指導ご鞭撻のほど、よろしく願います。」

タカモク

「西側から、きたんですって？」

トウサキ

「はい。」

タカモク

「で、このことは。」

トウサキ

「もうだいたい。」

タカモク

「もう還れないってことなんかも？」

トウサキ

「聞きました。」

タカモク

「未練とかないわけ？」

トウサキ

「そりゃまあ、あれですが・・・。私家族もないし、向こうも結構ひどい状態なんです。」

で。

タカモク

「そう、ましでしょ？ねえ？」

カメナシ

「天国ですよ。天国。」

トウサキ

「ですね。」

タカモク

「そうそう、じゃあもう粉のこととかも・・・。」

トウサキ 「聞きました。」

タカモク 「どんな風に？」

みんな一瞬、タカモクの発言を緊張して聞く態勢に。

トウサキ 「いや、あの・・・すごい話だなと。」

タカモク 「すごい？すごい？　すごいとは？どう？すごい？」

トウサキ 「いや、素晴らしいと。」

タカモク 「そう！　そうなんですよ！　素晴らしいものですから。これは。」

トウサキ 「びっくりしました。」

カメナシ 「まあ、実体験した人だからね。そりゃ話早いわ。」

タカモク 「そう、そう、じゃあもう問題なく、工場の一員として明日から働いてもらいましょう。はい。みんな拍手。拍手。」

トウサキ 「ありがとうございます。で、なにをすれば？」

タカモク 「当面、販売の方の担当してもらおうかな。サカムケ君の助手みたいな事で。いい？」

サカムケ 「あ、僕としては、全然。」

トウサキ 「あ、よろしくお願いします。」

タカモク 「さて、じゃあこれで本日の集会の議題は終わりかな。」

カメナシ 「ですね。それでは・・・。」

ポエム 「（突然立ち上がりながら）はいはいはい。」

カメナシ 「なんすか？」

ポエム 「あ、あの動議があるそうです。」

カメナシ 「は？」

ポエム 「あ、詳しくは、アミコさんから。」

ポエム、アミコを指して、座ってしまおう。
全員の視線、アミコ、仕方なく立ち上がる。

カメナシ
「なんすか？」

アミコ
「あ、あれです。あの緊急動議を提案したいと思います。」

カメナシ
「なんすか？それ？ 聞いてないっすよ？」

アミコ
「あ、緊急なので、突然すみません。でも！あの、集会の機会がいいと思ったので。あのこの機会に。」

カメナシ
「・・・どうします？」

タカモク
「・・・いいんじゃないの。中身は？なに？なんの動議？」

アミコ
「はい。あのここの責任者についての動議です。」

カメナシ
「はあ？ なんすかそれ？」

タカモク
「いいじゃない。言ってみたら。」

カメナシ
「そうすか？じゃあ。どうぞ。」

アミコ
「はい。じゃあ。」

アミコ、なにか書いた紙を取り出す。

アミコ
「あの、私、ヒガシカンザワ・アミコは、責任者交代の動議を提出します。現在、この丸誠漬物第2工場の責任者は、名義上、私、ヒガシカンザワ アミコとなっております、それは戦争後の現在も変わっておりません・・・」

カメナシ
「ちよつと、ちよつと、なにを言い出すのかと思えば・・・」

アミコ
「しかるに、現在、事実上、タカモク トメコ氏が・・・責任者であるかのごとく振るまっております。さらに、不公正な業務指示や、ハラズメント的な言動が日常化し、社員の間・・・不安が増しており、これ以上放置できない事態となっております。そこで、責任の所在を本来あるべきところに戻し、早急に事態の正常化をはかるべきだと思い、動議を發します。」

全員沈黙。

タカモク 「・・・なるほど・・・公然と反旗を翻すと、そういうこと。粉がなければさ、ここみんな干上がって、今頃、野たれ死んでたかもしれないっていうのに。」

アミコ 「それとこれとは、ちがうと思うんです。たしかに、粉を最初に作ったのはタカモクさんの功績ではあるけど、それは、従業員としての功績であって・・・。」

タカモク 「わかりました。」

カメナシ 「え？ いいんすか？」

タカモク 「でも他の人がどう思っているか聞いてみましょうよね？」

アミコ 「いいですよ。じゃあ・・・。」

アミコ、ポエムを見るが顔を背ける。

そこでサカムケを見る。

サカムケ、立ち上がるようにする。

その時。

タカモク 「トウサキさん！」

トウサキ、一瞬虚をつかれたようになる。

タカモク 「そうそう。ここは客観的な立場で発言してもらいましょうよ。責任者は、誰がいいのかってことだからさ。」

アミコ 「いいですよ。どうぞ。」

アミコ、自信満々で座る。

トウサキ、立ち上がる。

トウサキ

「えー、私まだ来たばかりなんで、その、この実態とか詳しく知らない・・・。」

タカモク

「いいの、いいの。内部のことに変に立ち入っていない人の意見が大事なんだから。こういうことは。」

トウサキ

「あ、そうですか？」

タカモク

「利害関係が薄い人がね。」

アミコ

「そうです。私もそう思います。」

トウサキ

「じゃあ、あの。」

みんな固唾をのんで、発言を注意する。

トウサキ

「・・・今まで通りでいいと思います。」

アミコ

「え？」

タカモク

「なるほど。」

アミコ

「だって・・・だって・・・理由は？」

トウサキ

「まず、今までみなさんが混乱の中を無事やってこれた功績は大きいと思います。それはたぶんタカモクさんの力があつたからだ。それからハラスメントと言いますが、国境の向こうは、そんなもんじゃありませんよ。それから比べたら、ここは、楽園だと思います。タカモクさんにこれからも責任者としてみんなを引っ張っていただいていたほうが・・・。」

カメナシ

「賛成ですね。」

アミコ

「ちよつと待って。あれですよ・・・、一部の、一部の意見だと思えます。それ。他の人の意見も聞いてくださいよ。」

タカモク

「いいんじゃない。」

カメナシ

「じゃあ、サカムケさん。どうですか？」

サカムケ

「えー俺？」

アミコ

「お、お願いします。ガツンと言ってくださいよ。」

サカムケ

「えーと。そうだな・・・」

アミコ

「ガツン、ガツン。で。もう。」

サカムケ

「俺も基本的には・・・。」

アミコ

「でた！基本的！」

カメナシ

「基本的には？」

サカムケ

「トウサキさんと同じかな。」

アミコ

「???。」

サカムケ

「まあ、そういうことなんで。」

カメナシ

「あらら、これ孤立無援状態ってやつ？」

アミコ

「（息が荒くなっている）ちがいます！私一人の意見じゃないんですよ！ポエムさん！ポエムさん！」

カメナシ

「あ、そうなの？　じゃあ御指名ですから・・・ポエム君。」

ポエム、アミコの視線をそらしながら。

ポエム

「あ、そうですね。なんか僕なんかは、結構冷静に、事態を見てきたほうだと思っただよ。その上でやっぱ、」

カメナシ

「あ、ということは。現体制に不満はないと？」

ポエム

「ああ、全くないですねえ。まあ、むしろこういう不安をおおるような発言はちよつといかがなものかと・・・思いますねえ。」

アミコ、わなわなして下を向いている。

カメナシ 「これ、どうしたもんですか？ 決を採る必要もないでしょ？」

タカモク 「いいえ。はっきりさせましょうかね。誰がここの責任者なのか。決を採って。」

カメナシ 「わかりました。では、さきほどの動議に基づいて、決を採りたいと思います。ここの責任者にもっともふさわしいと思う人に挙手をお願いします。まず、動議の提案者、アミコさんがいいと思う人。」

一人も手があがらない。

カメナシ 「はい。ゼロ。続いて、タカモクさんがいいと思う方。」

手が次々上がる。

最後にアミコがゆつくりと手を上げる。

カメナシ 「はい。全員です。決定しました。今後、ここの責任者は、タカモクさんと決定しました。まあ、時間の無駄でしたね。」

タカモク 「いやいや、こういうことはしつかり、はっきりさせた方がいいの。これですっきりしたから。ね。みなさん。」

カメナシ 「じゃあ、これで集会を終わります。はい。解散。」

タカモク 「あ、そうだ、アミコさん。」

全員、注目する。

タカモク 「片付けしといてくれるかな？ ここの。」

アミコ 「・・はい。」

タカモク 「それじゃ。お疲れさま。」

カメナシ 「おやすみなさい。お先に。」

トウサキ

タカモクとカメナシニ階へ去る。
「お先に失礼します。」

トウサキ、ちらつとアミコを見て去る。

サカムケ、アミコを見ている。なにか言いたげだがなにも言わずに去る。
ポエムは、アミコが黙って、机を片付けているのを見ている。

BGM
(

)

SE (ラジオ体操 第二)

全員、ラジオ体操をしている。

アミコ、妙に、元気がいい。

「〜今日も一日元気で過ごしましょう。」

タカモク

「はい。じゃあ朝礼始めます。」

アミコ、突然、ものすごい勢いで手を挙げる。

アミコ

「はいはい！はいはいはい！」

カメナシ

「なに？ いきなり。」

アミコ

「私、今日の目標いいます。はい。」

タカモク

「え？ああ、そう。じゃあアミコちゃん。どうぞ。」

アミコ

「はい！今日、私は！一日、与えられた仕事を、真剣に取り組みます！」

タカモク

「ああ、そう。」

アミコ

「はい。」

タカモク

「・・・いいんじゃない。」

アミコ

「はい！ありがとうございます。がんばります！」

カメナシ

「必死、もう。(苦笑) くくく。」

タカモク
カメナシ
タカモク
カメナシ
カメナシ
トウサキ
タカモク
トウサキ
カメナシ
トウサキ
カメナシ
カメナシ
トウサキ
カメナシ
トウサキ
カメナシ
ポエム
トウサキ
タカモク
カメナシ

「・・・じゃあ、次は？」

「じゃあ、私が、えー、今日一日、私は、チャレンジ精神を持って作業します。」

「え？なに？それ？」

「え？ だから・・・チャレンジ精神ですよ。こう挑戦する姿勢っていうか・・・」

「・・・はい。そうですか。ね、作業には、確実性であたってくださいね。拍手。」

「えーと、じゃあ、僕いいですか？」

「はい！ トウサキさん。」

「はい。あの、提案があるんですけど。」

「提案？」

「粉の生産について。」

「え？粉？ なんですか？」

「粉の生産量を。」

「生産量は、僕があれしてますけど、何か？」

「現在の二倍にしたらどうかと。」

「え？二倍って？」

「そうです、二倍。」

「え？なんで？」

「二倍稼げます。」

「稼げるって・・・。」

「ですね。」

「僕が、みたところ、二倍までは生産増やせますよ。」

「え？ そうなの？」

「無理だよ。」

ポエム 「ですよね。」

トウサキ 「なぜですか？」

カメナシ 「無理だって。そんなの。」

トウサキ 「そうかな。」

カメナシ 「だってあれだよ、簡単に二倍って言うけど、木の実だって、二倍必要なんだよ。そんだけ実取っちゃうとさ、木の疲弊だってあるだろうし。」

トウサキ 「木の疲弊？ あんなにあるのにか？ 実だって、ずいぶん地面に捨ててあるじゃないですか？」

ポエム 「ああ、たしかに。」

カメナシ 「あれは、堅すぎるやつ……。」

トウサキ 「今の二倍、稼げるんですよ。二倍どころじゃない……これチャンスですよ。」

タカモク 「チャンスって？」

トウサキ 「今、東側で、MSDが、いや、この粉、とんでもない価格で取引されてるんです。」

タカモク 「とんでもない？」

トウサキ 「今の取引額のほしい10から30倍。」

サカムケ 「30倍？」

ポエム 「30って……それちょっとすごくないですか？」

トウサキ 「販売も、もっと気を使うべきです。」

サカムケ 「そんなこと言ったってよ。」

トウサキ 「ずいぶん損してるはずですよ。」

タカモク 「そうなの……。」

アミコ 「私、賛成です！」

タカモク 「え？」

ポエム 「なにに？」

アミコ 「二倍にできると思っています。作業量も、今だって、大したことないし。できます。全然。」

サカムケ

「え？だつてさ……。」

アミコ

「全然いけませんよ。タカモクさん。」

タカモク

「そうね……。やりましょうか。」

トウサキ

「今までは、生産管理どうしてたんですか？」

カメナシ

「え？どうしてたかつて？」

トウサキ

「MPRですか？」

カメナシ

「え？ え？ なに？ エムがピーした？」

トウサキ

「あの、もし差しさわりが無ければ、僕が、生産管理やりましょうか？」

カメナシ

「なにいつてんの？ それは、ぼくのさ……。」

アミコ

「あ、私もそのほうがいいと思います。」

カメナシ

「なんでよ？」

アミコ

「だって、トウサキさんが言い出したことだし。そういうの慣れてそうだし。」

トウサキ

「慣れてますよ。」

アミコ

「ほら！」

カメナシ

「いやいや、そういう事じゃないでしょ？」

タカモク

「いいじゃないの。カメナシ君。彼がやるっていつてるんだから。」

カメナシ

「そりゃ、そうですけど……。」

トウサキ

「まかしてくださいよ。」

カメナシ

「いいけどさ……そりゃ。」

タカモク

「はい。じゃあ作業準備、袋詰めは？」

アミコ

「あ、私やります！」

タカモク

「あ、そう……じゃあ。」

アミコ

「はい。」

「じゃあ、トウサキさん、打ち合わせしましょう。工場の準備はサカムケさん、それからポエム君お願いします。」

カメナシ 「えーとあの・・・僕は？」

タカモク 「そうね・・・アミコちゃんと袋づめやってもらおうかな。」

カメナシ 「・・・袋詰めて・・・。」

タカモク 「はい！じゃあ5分後から作業開始、解散。」

全員 「今日も一日、安全に！」

タカモクにくつついてトウサキが相談しながら、工場入口から去る。

ポエム、サカムケも工場に去る。

アミコは袋詰め作業用に机を準備し始める。

カメナシ 「で？なにをやればいいわけ？」

アミコ 「えーと、カメナシさんには・・・粉のほうの・・・あ、もう粉がない。」

カメナシ 「えー？あんだよ？ちゃんと準備しといてくださいよ。ったく。」

アミコ 「すみません。取りに行ってもらえますか？」

カメナシ 「え？俺が行くの？」

アミコ 「すみません。」

カメナシ 「何だよもう・・・。」

カメナシ、工場入口から去る。

アミコ、なにか書いた紙をカメナシの上着のポケットに入れる。

そこへ、タチバナが二階からセーラー服を抱えて降りてくる。

アミコ 「なに？」

タチバナはゆっくり扉に向かう。

アミコ 「なにその目は！なんか言いたいでしょ？」

タチバナは、アミコに視線を合わせながら、それでもゆっくり扉に向かい続ける。

アミコ 「なんか言えばいいじゃんか！」

タチバナ、扉の前で立ち止まる。

アミコ 「・・・死んでくれないかな・・・もう。」

タチバナ、ゆっくり扉から出ていく。

アミコ 「もう死んでよ・・・頼むからさ。」

ゆっくり暗転。

BGM (TRFダンスエクササイズ)

元気にダンスしているトウサキ。

アミコも元気がいい。そのほか、サカムケとポエムも一生懸命。

タカモクはついていくのに精いっぱい。

カメナシはいない。

全員、うって変わって綺麗な作業着姿。

いかにも金周りが良くなっている様子。

BGM終了。

トウサキ

「ハイ終了。今日も一日元気で過ごしましょうね。タカモクさん、どうしました？」

タカモク

「(息が荒い) ちょっと、すみません・・・はあはあ・・・ちよつと・・・。」

トウサキ

「なんですか！ この程度の運動で！」

タカモク

「はい・・・すみません。」

トウサキ

「みんなも、もっと元気よく。わかっているよね？」

ポエム

「わかっています。」

トウサキ

「いいですか！今は戦時ですから、我々が、ここで生きていくために、もっとも重要なのが体力ですよ。わかりますよね！」

アミコ

「タカモクさんには、無理じゃないですか？ この運動は。」

タカモク、膝をついて息をしている。

トウサキ
タカモク
アミコ
タカモク
アミコ
トウサキ
タカモク
トウサキ
タカモク
ポエム
タカモク
ポエム
タカモク
トウサキ
サカムケ
タカモク
サカムケ
アミコ
サカムケ
アミコ
トウサキ
タカモク

「あのねえ……。そんななさけないことで、どうするんすか？ え？」

「……すみません。」

「よくわかってないんじゃないですか？ 体力の重要性。」

「わかってます。わかってますけど……。」

「ついてこれない人は、罰則ってことにしたらどうでしょうか？ トウサキさん。」

「ああ、そうですね。」

「え？ なんの？ 罰則って。なんの？」

「やっぱり、人間、こう罰則とかないと、キリつとしないでしょうから。どう思いますか？ ポエムさん。」

「ちよつとポエム君、なんとか言ってくれない？」

「……タカモクさん……。これ、仕方ないと思いますよ。」

「え？」

「罰則、仕方ないっしょ。」

「サカムケさんは？」

「いや……。そうですね。」

「ちよつと待ってよ……。そういうのはさ。止めよう。ね。止め、やめ。」

「ちよつと……。いきすぎかな……。と。」

「必要でしょ？ だつてちゃんとできないんだから。ちがいますか？」

「まあ、そりゃ。」

「規律って意味でも、必要だと思う。私は。」

「どうします？ タカモクさん。」

「……。わかった。いいです。それで。」

トウサキ

「じゃあ、明日からちゃんとしてこれない人は、罰則としましょう。そういうことです。タカモクさん。」

全員、拍手。

トウサキ

「えー本日のノルマの発表です。えー。本日中に、30キロ納品予定ですが、袋詰めが遅れてます。粉の製造はいいんで、全員で袋詰めにかかってください。」

サカムケ

「あの・・・ちよつと聞きたいんですが？」

トウサキ

「え？なに？」

サカムケ

「あの・・・昨日から、あのカメナシさんが見当たらないんだけど・・・。」

トウサキ

「ああ、そうね。」

サカムケ

「どうしたのか？と思って・・・。」

タカモク

「ああ、そういやそうね。」

アミコ

「どうでもいいでしょ？」

サカムケ

「え？ いや、よくないでしょ？ だって一人いなくなっちゃって・・・。」

アミコ

「嫌ってたでしょ？ 嫌ってたじゃない？ 彼のこと。」

サカムケ

「・・・え？ まあ、そりやそうだけど。」

アミコ

「じゃあ、いいじゃないですか。いなくなっても。でしょ？ 私も、いなくなつてよかつたと思つて。だって、あれですよ、食料だって、一人分減るわけだし。彼いなくても粉の生産困らないし。」

トウサキ

「どう思います？ ポエム君。」

ポエム

「ですね！」

アミコ

「ほら。」

サカムケ

「・・・。」

トウサキ

「よかつたんじゃないですか？」

サカムケ

「・・・わかんないけど。」

トウサキ

「じゃあすぐに、作業開始しましょう。準備にかかってください。では、今日も一日、効率的に！」

全員

「今日も一日、効率的に。」

トウサキ

「解散！」

トウサキを除いて、全員きびきびと工場扉へ去る。

トウサキ、全員が去るのを見送ってから去ろうとする。

その時、扉からタチバナが顔を出す。セーラー服を着ている。

トウサキ、タチバナに気がつき、振り返る。

トウサキ

「また……。」

タチバナ

「助けにきたよ……。」

トウサキ

「え？」

タチバナ

「セーラー戦士。」

トウサキ

「なんですか？」

タチバナ

「助けに来たよ……。」

タチバナ扉からいなくなる。

トウサキ、慌てて、追いかけてみるがすでにタチバナは消えている。

トウサキ

「……なんなんだよ。あいつ。」

ゆっくり暗転。

夜

ポエム、サカムケが机を挟んで向かいあつて椅子に座っている。

「……まずいと思うよー俺は。」

「そうですか？」

「死んでるよ。もう。」

「……ええ？そうですか？」

「そうだよ。絶対。」

「トウサキさんが、殺しちゃったってことですか？」

「それ以外考えられる？」

「いや、それはないでしょう……。そこまですないでしょ？」

「カメナシ……。結構うざがられてたからなあ……。」

「それはないと思いますよ、僕は。」

「いや、そうだって。」

「ずいぶん、決めてかかるじゃないっすか。」

「それとさ、最近、事あるごとにさ、タカモクさんを……。」

「やってますよね。そもそも、リーダーはタカモクさんだったはずでしょ？」

「いつの間にやら、実権は、彼だよな。」

「なんとなくそうですね。」

「独裁だよ。独裁政権。」

「でも、なんかにつけ、みんなに聞くじゃないっすか？意見とか……。」

「手だよ、それが。なんか民主的な風、装って。」

ポエム

「でも、うまくいってんじゃないっすか、このところ。粉のあれも増えたからこつちも贅沢できてるし。文句言うあれもないんじゃないっすか？」

サカムケ

「あれ？ でもちよつと待てよ・・・あれ・・・あれじゃね？ もしかして・・・。そういえば、そういえば！あいつよ、ここから出られない、とかって聞いても、全然動揺とかしなかった。そういえば。」

ポエム

「そうですかあ？ けっこうビビってた、と思いますよ？」

サカムケ

「いやいや、全然だった。全然。全然。微動だにしていなかった。うん。」

ポエム

「・・・そうでしたっけ？」

サカムケ

「それからあれだよ。なんか輸送機がーとか言ってただろ？ ここに落ちた理由を。」

ポエム

「ああ、言ってた、言ってた。」

サカムケ

「撃墜された飛行機からよ、落下傘で逃げてんのに、憶えてないって、これあり得るか？」

ポエム

「ああ、まあそりゃあれですよね。」

サカムケ

「ほらほら、出てきた、出てきた。」

ポエム

「なんかうれしそうですね。」

サカムケ

「ちがうよ。そういうことじゃねえよ。」

ポエム

「そういえば・・・あれでしたね。」

サカムケ

「なに、なに？」

ポエム

「あの・・・あの夜の集会ですよ。」

サカムケ

「・・・ああ。ああ、あれね。」

ポエム

「あの時、あれ口火切ったの・・・。」

サカムケ

「うん。そうだ！」

ポエム

「ね？」

サカムケ

「そうだよ！思い出したよ！あいつだよ。」

ポエム

「ですよね。」

サカムケ

「あいつがよ、言い出したからだよ。」

ポエム 「なんか、ほらあ、理屈で丸め込まれたあれになったでしょ？」

サカムケ 「そうだよ。そうだよ。それでよ、機先をそがれちゃってな。」

ポエム 「そうそう。」

サカムケ 「そういう感じだっただろ？ な？」

ポエム 「そうなんですよ。そうなんですよ。それですよ。あんな形になっちゃって。思わぬって言うか、あれでしたよね？」

サカムケ 「なんだよ、なんだよ！俺たち利用されちゃってたか？え？」

ポエム 「俺、見ちゃったんですよ。」

サカムケ 「え？なにを？」

ポエム 「あの人、金塊貯め込んでますよ。」

サカムケ 「え？なに？」

ポエム 「金塊ですよ。金塊。これぐらいのやつ、いくつも。」

サカムケ 「金の、金塊？」

ポエム 「昨日、トウサキさんと一緒に東側へ行ったでしょ？」

サカムケ 「行った。」

ポエム 「その隙に、あの子のバッグの中……。」

サカムケ 「どういうことだと思う？これ？」

ポエム 「いや。なんなんでしょうか？」

サカムケ 「俺が思うに……奴は、スパイだよ。」

ポエム 「え？スパイ、それ、あれっすか？ 007みたいな？」

サカムケ 「敵側によ、粉を蔓延させる目的で潜入してきたんだよ。そうだよ。そういうことだよ。な！そんだったらいろいろと……。」

ポエム 「ないっすね。それは。」

その時、トウサキの唄声が階段からする。

トウサキ 「(007のテーマ) デデデデン、デデデ、デッデッデデンデデデ・」

トウサキが現れる。

ポエム・サカムケ 「マジでー！」

トウサキ 「そんなわけないじゃないですか。」

ポエム 「ですよ。」

トウサキ 「考えてみてくださいよ。粉がいつまでも売れ続ける保証はない。だから、蓄えとかないといけないですよ。いつまで国境がこのままかもわからない。永遠にここは、どことも行き来できないのかも知れない。だから金に換えて、今のうちに蓄えとくんです。」

ポエム 「・・・あの・・・。」

トウサキ 「ここに降りてきたのは、狙ってじゃないですよ。覚えてないっていうのは、ちょっと嘘ですね。ほんとは・・・まあ、実は、最初から仕組まれてて。東側には、行く気がなかったんです。撃ち落とされたことにして、薬品は、届けない。国境の直前で落下傘で脱出する手はずだったんだけど、まあ、自分だけ、遅れたんですよ。」

サカムケ 「・・・そんなら、最初から・・・。」

トウサキ 「ここがどんなところかわからなかったんで。つい。いきなりここを権力抗争に巻き込まれた感じだったでしょ。」

ポエム 「・・・でも。」

サカムケ 「なんで、集会で、タカモクさんに？話ちがってたでしょ？」

トウサキ 「まだ、あの時点では、みなさんについてよく知らなかったし、それに、ここの状況もよくわかってなかったから。あれは、たぶんあの時点でのベストだと思ったんですよ。」

サカムケ 「だって話ちがっちゃったじゃない・・・俺とした話と。」

トウサキ 「そりです。話ちがっちゃったことは謝りますよ。でも信じてくださいよ。ここのみんなが生き残ることだけを考えて僕は。」

サカムケ 「まあ・・・そりゃ。あれだ。なあ？(ポエムに)」

ポエム 「あの・・・カメナシさんは？」

トウサキ 「ほんとに知らないんです。ただ・・・」

ポエム 「ただ？ なんですか？」

トウサキ 「いなくなる前の日に、僕のところに来て、ここを燃やしてやるって。」

サカムケ 「燃やす？」

トウサキ 「そうです。」

サカムケ 「ほんとにそうだったの？」

トウサキ 「そうです。」

ポエム 「カメナシさんが？」

トウサキ 「そうです。燃やすって。」

サカムケ 「意味が判らないよ。なんで彼がここを燃やすの？」

トウサキ 「僕もわかりませんでした。でもいくら聞いても、わけのわからないことを口走るばかりで。」

ポエム 「で？」

トウサキ 「突然、飛び出して行って。追いかけたんですが。林の中で見失った。ちよつと危険だと思つたので、みんなには事態が収まつてから、説明しようと思つたんですよ。」

サカムケ 「・・・そうなの・・・」

トウサキ 「すみません。黙ってて。」

サカムケ 「いやいや、いいんだけどさあ。ほら、前の事があるから・・・ちよつと神経質になつてるんだわ。俺らも。な！（ポエムに）」

ポエム 「あ？ はあ。」

サカムケ 「あれだわ、うん。これからもさ、一応リーダーとして。」

トウサキ 「いやあくまでも、僕は、補佐役です。リーダーはタカモクさんですから。」

サカムケ 「まあまあ、そうだけでもね。」

トウサキ 「誤解が解けましたか？」

サカムケ

「いやあ、もう全然。」

トウサキ

「ポエム君、ごめん。いろいろ行き違ってたみたいで。」

ポエム

「いやあ・・・そうなんですよね。うん。もうこちらこそ、すみません。」

トウサキ

「これからも、みんなで力を合わせてやっていきましょうよ。ここで生きていくもの同士。」

トウサキ、サカムケの手を握る。

サカムケ

「それだよ。それ。うん。オーケーオーケー。」

トウサキ

「ポエム君も。」

ポエム、二人の手を握る。

ポエム

「はい。がんばりましょう。」

三人、しばらくそのまま感動に浸っている。

トウサキ

「ああ、もうこんな時間ですね。寝ましようか。」

サカムケ

「だね。もう解散！」

ポエム

「じゃあ、お休みなさい。」

トウサキ

「お休みなさい。」

サカムケとポエムが二階に向かいかける。

トウサキ

「あ、そうだ。お二人にお話ししとかなきゃ。」

サカムケ

「うん。何？」

トウサキ

「あれですよ、ほらリーダーのうんぬんでもう揉めないように、2年間は、すくなくともリーダーが変わらない感じでしょうかと思うんですよ。」

サカムケ

「二年間？」

トウサキ

「そうですね。二年。大統領みたいな感じで。で二年やって、また考えましようって感じにすれば、なにかあっても二年で交代できるし。みんなも納得できると思うんですよ。あ、これはアミコさんが考えたんですが。」

サカムケ

「あ、いいんじゃない？なあ？（ポエムに）」

ポエム

「もう、なにも問題ないです。」

トウサキ

「じゃあそれで。」

ポエム

「なんかあれですね・・トウサキさんが一番みんなのこと考えてた感じで。すみません。なんか。疑うようなあれしちゃって。」

トウサキ

「いいんですよ。誤解が解けたんだから。」

サカムケとポエムが二階に去る。

トウサキ二人を見送る。

すると扉が開いて、アミコが現れる。

トウサキ

「ありがとうございます。知らせてくれて・・。まあ、おかげで変な事が、起きる前に摘み取れた。」

アミコ

「あれ嘘ですよ。」

トウサキ

「え？」

アミコ

「あんな、感動したようなふりして・・あの人たち。全然そう思っていないから。」

トウサキ

「そうなんですか？」

アミコ

「みんな腹の底では何考えてんだか。」

トウサキ

「・・・。」

アミコ 「・・・ほんとは、どうなんですか？」

トウサキ 「え？ ホントとは？」

アミコ 「金塊。」

トウサキ 「ああ。聞いてたんだ。」

アミコ 「どうする気ですか？」

トウサキ 「あのままだけ。」

アミコ 「嘘ですよ。そんなの。ここのこと考えてるなんて。」

トウサキ 「どうしてですか？」

アミコ 「みんな自分のこと考えてる。そんなの当たり前でしょ。」

トウサキ 「なるほど。」

アミコ 「そうじゃない人なんか見たことない。トウサキさんだってそうでしょ？ でもそれを私は、悪いと思わない。」

トウサキ 考えている。

アミコ 「あ・・・私・・・処女ですよ。」

トウサキ 「え？」

アミコ 「男の人は、処女がいつて言うじゃないですか？」

トウサキ 「そうですか？」

アミコ 「あ、あれですよ。おっぱいだって、今はこんなだけど、揉めば、揉んでくれば人がいれ
ば、もっとでかくなりますよ。きつと。」

アミコ、いきなり胸を揉みだす。

トウサキ 「逆です。小さくなりますから、それ。」

アミコ 「・・・金塊どうする気なのか、私にだけは教えてください。」

トウサキ、しばらく考えている。

トウサキ 「・・・協力してくれますか？ だったら教えます。」

アミコ 「やります。」

トウサキ 「明日、さつき言ったリーダー交代の原則2年縛りを提案します。」

アミコ 「あんなこと、私言つてない。」

トウサキ 「そう、ああ言つておかないと、自分が発想したとか言うと、また疑惑がわくから。ついで。」

アミコ 「わかってます。あの人たち疑い深し、すぐ流されるし。」

トウサキ 「そうなんです。でも重要なのはそこじゃない。」

アミコ 「え？」

トウサキ 「2年しばりの後にちよつとだけ追加することがあるんですよ。それは補佐役も同じく、2年は変わらないつてことにします。」

アミコ 「ああ。トウサキさんが？」

トウサキ 「そうです。名目は、タカモクさんがこのリーダーだけど、実権は僕が握る。」

アミコ 「ああ・・・なるほど。」

トウサキ 「賛成してくれますか？」

アミコ 「はい。絶対賛成しますよ。だから・・・。」

トウサキ 「わかりました。実は・・・西側に、話を通せるルートがあつてね。」

アミコ 「え？」

トウサキ 「いくらか積みめば、国境を越えられそうなんですよ。」

アミコ 「ほんと！」

トウサキ 「ほんとです。そのための交渉用なんです。金は。」

アミコ 「そうなんだ・・・。」

トウサキ 「西側にいければ、粉の販売も、もともっと、拡大できる。私の薬のルートもあるし。それしたら、すごいことになる。きっと。」

アミコ 「すごいですか。」

トウサキ 「すごいですよ。だから秘密にしておかないと。わかりますよね。」

アミコ 「はい。」

トウサキ 「じゃあ、そういうことで。あ、それから、ちよつと聞いておきたいんだけど。」

アミコ 「なんですか？」

トウサキ 「カメナシさんになにかしました？」

アミコ 「え？いいえ？」

トウサキ 「そうですか・・・。突然どうしたのかな・・・。」

アミコ 「さあ？ わかんないけど。」

トウサキ 「それと、ときおり、ここに入ります。変な人。」

アミコ 「ああ。」

トウサキ 「あれ、誰ですか？」

アミコ 「あの人は、元のここの従業員で、タチバナって人です。」

トウサキ 「タチバナ・・・。」

アミコ 「粉の影響で、おかしくなっただんです。」

トウサキ 「粉の・・・。」

アミコ 「あの人・・・漬物社員のくせして、漬物が嫌いで。」

トウサキ 「ああ、だから・・・。」

アミコ 「粉を吸いこんで、それから、なんか癖になっちゃって、たびたびやっってるうちに、ああなっただんですよ。」

トウサキ 「最初の中毒者か。」

アミコ 「みんな、あの粉を吸うとどうなるか知らない風なこと言ってたけど、ほんととは知ってる。タチバナさん見てるから。」

トウサキ 「なるほど。」

アミコ 「最近じゃ、森の中に入り込んでやって・・・ときおり、食料あさりにくるんですよ。この前も二階に入り込んで。お風呂も入らないから、汚くて。」

トウサキ 「なんですか？ムガール帝国って？」

アミコ 「ムガール？なんですか？ それ？」

トウサキ 「いや、そのタチバナさんが言ってたんです。ムガール帝国って。」

アミコ 「おかしくなった人のことなんかどうでもいいんじゃないですか？」

トウサキ 「まあ・・・そうですけど・・・ちよつと気になってね。」

アミコ 「じゃあ、私、行きますね。あの・・・おやすみなさい。」

トウサキ 「はい。おやすみなさい。」

アミコ、二階へ去る。

トウサキ 「出てこいよ。」

扉が少し開いて、タチバナが顔だけのぞかせる。

トウサキ 「なんだよ・・・お前。」

タチバナ 「ムガール帝国・・・」

トウサキ 「どういう意味だよ。それ。」

タチバナ 「助けるよ・・・。」

トウサキ 「いいかげんにしろよ・・・。」

暗転
夕チバナ、すつと扉から引つ込む。

明転。

朝の明かり。

朝礼の最後といった感じ。

トウサキ、タカモクがみんなの前に出ている。

サカムケ、ポエム、アミコが立って聞いている。

拍手。

トウサキ

「・・・では、リーダーの任期は2年間ということで、決定します。ついですが、補佐役が必要な場合は同じく2年ということでもよろしいでしょうか？」

アミコ

「問題ないと思います。」

サカムケ

「いいんじゃないすか。」

ポエム

「賛成です。」

トウサキ

「では、そういうことで本日からこの方向でやっていきたいと思います。では、リーダーのタカモクさんから一言どうぞ。」

タカモク、ポケットから紙を出す。

タカモク

「これ。」

サカムケ

「なんすかそれ？」

タカモク

「カメナシ君の前掛けのポケットに入ってた。」

サカムケ

「なんすか？」

タカモク 「誰？ こんなことやってさ、なにしたいの？ 誰なのよ？」

タカモク からその紙全員に見せる。

その紙に「お前は殺される！」とか書いてある。

トウサキ 「なにこれ？」

ポエム 「なんですか？ それ？」

タカモク 「私もう、粉を作るの止めようと思う。」

トウサキ 「え？ 何言ってるんですか？」

タカモク 「こんなことになってさ、またあの時の、二の舞になっちゃうでしょ？」

トウサキ 「なにを言ってるんですか！ おかしくなっただんですか？」

タカモク 「これって、全部、粉のせいじゃない？ 粉、作り始めてからさ。みんなおかしくなってきた・・・。」

トウサキ 「粉が無くて、どうやって暮らしていくんですか？」

タカモク 「ここは漬物工場なんだから、漬物つくりますよ。ね？ 前みたいにさ。」

アミコ 「なに言いだすのかと思えば・・・ふざけないで！ どうやって生きてくの！ 粉を作ってたから生きてこれたのに！ 粉が無きゃ、ガソリンだって、食料だって買えないのに！」

タカモク 「ちがうよ、アミコちゃん。それはきつとちがうよ。粉を作ってたから、他のことで生きられないようになっただけなんだ・・・。」

アミコ 「なに言ってるの・・・なに言ってるの・・・これ以上勝手なことさせないから・・・。」

アミコ、ハサミを机から取り出して、タカモクに向ける。

アミコ 「ここは私の工場だから・・・私のものだから・・・。」

ポエム 「アミコさん！」

サカムケ 「ちよつと！ どうしちゃったの？」

トウサキ 「とにかく・・・タカモクさんも。落ち着いて話しましょうよ。アミコちゃんも。」

その時、工場の扉の方から煙が出てくる。

ポエム 「あれ？あれ？焦げ臭い・・・なんだ？」

サカムケ 「あれ？なんだ？ おい。」

ポエム 「やばいっすよ。煙でてる！」

サカムケとトウサキ扉に走る。

サカムケ 「わわ・・・火事！火事！」

ポエム 「えー！」

タカモク 「早く、消火器！消火器！」

サカムケ 「あれ、あれ、あそこに。」

タカモク 「扉の向こうにあるから。早く消して！早く！」

4人、扉の向こうに去る。

アミコ、茫然としている。

扉から、カメナシが現れる。

カメナシ、灯油缶を持っている。

アミコ 「なんなの？あんた？」

カメナシ 「お、おれは！ヤラレねーぞ！クソ！クソ！」

アミコ 「なにすんの！」

カメナシ 「やられる前にな・・・やってやる！おらー！」

カメナシ、アミコに灯油をぶっかける。

そこにポエムが工場から現れる。

ポエム 「カメナシさん！ なにしてんすか？」

カメナシ 「お前ら！俺を殺そうったってな！、そう簡単には、ヤラレねーんだ。ちくしょー
ー！」

カメナシ、チャッカマンを取り出す。点けようとするがなかなか付かない。

アミコ 「ぎゃーー！」

ポエム 「ああ、アミコさん・・・。」

カメナシ 「邪魔すんじゃねー！」

ポエム 「あ、はい。」

ポエム、くるっと後ろを向き去ろうとする。

アミコ 「助けて！」

カメナシ、びくっとして止まる。

アミコ 「お願い・・・助けて。」

カメナシ、振り返って、アミコとカメナシの間に立つ。

ポエム 「・・・止めましょうよ。こういうのは。」

カメナシ 「けけけ。止めてたまるかよー！」

ポエム 「わー！ー！」

カメナシ、チャツカマンを点けようとする。

アミコ 「ごめんなさい！ごめんなさい！！ごめんなさいー！！ 嘘だからー。あれ嘘さだからー！」

ポエム 「アミコさん？」

アミコ 「お願い・・・許して・・・ね？」

ポエム 「・・・あれ、書いたは？ アミコさん？」

アミコ 「あんなの信じちゃうなんておかしいって。」

カメナシ 「うっせー！ うっせー！もう誰も信じねー！ちくしょー！ うわー！ー！ー！」

ポエム 「やめてー！ー！」

SE (鞭の音) ビシュ！

カメナシのチャツカマンがふつとぶ。

タチバナ 「(声) セーラーロワイヤル・ホイップング・スペシャル！おしおきだよーこの豚

野郎！！！」

タチバナ、セーラー服を着て、鞭を持って扉から現れる。

カメナシ

「ひー！」

ポエム

「タチバナさん……。」

タチバナ

「ムガール帝国！破れたり！ あははははは。」

タチバナ、落ちた灯油缶を拾い上げて、扉から飛び出していく。

カメナシ

「ちくしょー。」

カメナシも飛び出していく。

サカムケ

「(ポエムに) あれ、追いかけるって。やばいよ。」

ポエム

「あ、はい。ちよつと待て！カメナシさん！」

ポエム追いかけていく。

タカモク

「(アミコに) これ。早く着替えないと。」

アミコ、泣きじゃくっている。

トウサキ

「なんで、あんなことしたの？」

アミコ

「……。」

トウサキ

「まあ、いいんだけど。」

アミコ

「みんなも、嫌ってたでしょ？ うざがってたでしょ？」

サカムケ

「そりゃそうだけどさ。」

アミコ

「そんな人いなくてもいいでしょ？」

サカムケ

「そういうことじゃないでしょ？」

アミコ

「あの人は・・・私の邪魔したから。」

トウサキ

「邪魔？」

タカモク

「もういいからさ。アミコちゃん。」

アミコ

「タカモクさん・・・ここは私のものでしょ？」

タカモク

「わかってるよ・・・。行こう。さあ。」

アミコ

「・・・はい。」

タカモク、アミコ二階へ去る。

トウサキ

「なんだったんだ？・・・あいつは。」

サカムケ

「タチバナさん。」

トウサキ

「聞きましたよ・・・もとの従業員でしょ？で、粉の使い過ぎで中毒者になっちゃた人。」

サカムケ

「あれ。去年のさ、忘年会でやったんだよ。」

トウサキ

「なにを？」

サカムケ

「せーらー戦士ってさ。」

トウサキ

「せーらー戦士。」

サカムケ

「俺たちが、ムガル帝国からやってきた怪人。で、タチバナさんがせーらー戦士。で踊り狂うっていう。」

トウサキ

「・・・ムガル帝国ってそういうこと。」

サカムケ

「それだけは覚えてたんだ・・・。」

トウサキ

「よかったころの思い出ですか・・・。」

サカムケ

「俺たちのせいなんだわ。」

トウサキ

「え？」

サカムケ

「あの人・・・俺たちが・・・おかしくしたんだ。」

トウサキ

「それが、みんなの言ってる、あの事ですか？」

サカムケ

「粉ができた時、最初、これがどれだけのものかさっぱり分からなかった。でも、たまたま木の皮の漬物が嫌いでタチバナさんだけは、食ってなかった。」

トウサキ

「じゃあ、粉を嗅いで・・・」

サカムケ

「最初の中毒者。」

トウサキ

「やっぱり知ってたんですね、あの粉を使うとどうなるか。」

サカムケ

「みんなはどうするか？話し合ったけどよ。あの人だけだったよ、反対したのはよ。タチバナさんは、その効果を身を持って知ったからな。どうしてもだめだったよ。こっちはさ・・・こっちは暮らしてくだけでいいからっている説得したりしたけどよ。しまいにはよ、木を燃やすって大騒ぎしだしてよ。」

トウサキ

「・・・それで？」

サカムケ

「それで・・・みんなで話し合って・・・粉を、嗅がせ続けて・・・。」

トウサキ

「・・・。」

サカムケ

「たったの1週間でああなったよ。あの粉を嗅ぎ続けると、すぐに廃人同様になる。あんたも知ってるでしょ？」

トウサキ

「うん。」

サカムケ

「それでも粉を作るしかないからね。こんなものにも頼らないと生きていけないからね。」

トウサキ

「・・・ひどいですね。」

サカムケ

「作るしかなかったからね・・・粉を。」

トウサキ

「・・・。」

サカムケ

「仕方ないって、便利な言葉だよ。自分たちが生きてくためだから・・・仕方ない。」

トウサキ

「・・・。仕方ない。」

サカムケ

「そのうちよ、鈍感になってくんだよ。俺たちが暮らしてくつてことは、粉でのたうちまわつて狂つてく人が、どんどん増えてくつてことだからよ。自分たちの幸せが誰かの犠牲で成り立つてることがよ……。忘れてくんだよ……。」

そこに、ポエムの声が外からする。

ポエム（声）

「サカムカさん！サカムケさん！」

サカムケ

「どした？」

ポエム（声）

「たいへんすつよ！燃えてる！木が！木が！木が！」

サカムケ

「何だつて？」

ポエム（声）

「木が燃えてる！」

サカムケ

「なんだー？」

そこにタカモクが下りてくる。

タカモク

「どうした？」

サカムケ

「木が・・燃えてるつて・・。」

タカモク

「ええー！」

ポエム、飛び込んでくる。

ポエム

「タチバナさんが・・灯油かぶつて・・それに自分で火をつけて、林に飛び込んでいつて……。」

タカモクとサカムケ飛び出していく。あわててポエムも飛び出す。背景が赤く燃え上がるよう変わる。

二階から、アミコが下りてくる。
茫然と立ちすくむトウサキ。

トウサキ

「木が、燃えました。」

アミコ

「燃えた……。」

トウサキ

「タチバナさんが……灯油をかぶって……火を点けたんだそうです……。」

アミコ

「タチバナさん……。」

トウサキ

「自分と一緒に、木も葬りたかったんですかね……。」

天井の穴から白い灰が降ってくる。

トウサキ

「……木の灰だ……木の灰だ。」

アミコ

「綺麗だな……。」

アミコ

「きつと……タチバナさんは助けたかったんだ……。」

トウサキ

「助たい……。」

アミコ

「私たちが欲に狂っちゃう前に……。私は、タチバナさんが死んでくれればいいって思ってた……。でもあの人は、あんなになっても……。あんな風になっちゃっても私たちにことを思ってたんだ……。」

灰は、舞台上を覆い尽くすように降り注ぐ。

やがて、灰は真っ赤に色づいていく。

BGM ()

ゆっくり暗転。

朝

蝉の声。

灰が降り注いだ後の工場。

箒で灰を履く。アミコ。

工場の奥からタカモクの声。

タカモク（声）

「カメナシ君、こっちこっち！アミコちゃん！そっち終わったらさ。こっちもお願いね。」

アミコ

「はい！」

扉から材木や工具を持って入ってくる。サカムケとポエム。

サカムケ（声）

「・・・だからよ。振られたやつにそれを言う権利はないんだって。」

ポエム（声）

「あれですよ・・・あれですよ。それはまだ決まったわけではないんですよ。」

サカムケ（声）

「なあ。」

二人扉から入ってくる。

ポエム

「あ、あのアミコさん、そっちはあれですよ。」

アミコ

「いいです。ここは大丈夫だから。」

サカムケ

「いいからこっちやるぞ。」

アミコ

「じゃあ、天井お願いしますね。」

サカムケ

「はいはい。」

アミコ

「その後もやること山積みだから。」

サカムケら三人は二階に去ろうとする。

と同時に、トウサキがバッグを抱えて下りてくる。

サカムケ

「行っちゃうの・・・やっぱり。」

トウサキ

「はい。」

ポエム

「・・・元気で。」

トウサキ

「ありがとうございます。」

サカムケ

「じゃあ。」

3人、二階去る。

トウサキ

「いろいろとお世話になりました。」

アミコ

「ほんとに・・・大丈夫なんですか？」

トウサキ

「大丈夫でしょう。きっと。」

アミコ

「そうですか。」

トウサキ

「・・・どうする気ですか？」

アミコ

「漬物作ります。」

トウサキ

「漬物？」

アミコ

「だって、ここは漬物工場だから。皮はだいぶ残ってし。粉を作った分だけ、皮の漬物を作るんです。」

トウサキ

「でも・・・」

アミコ 「わかってます。粉みたいに売れないでしょうけどね。それでも、この漬物で一人

でも粉の中毒から覚めてくれればいいと思うから。」

トウサキ 「・・・そうですか。」

アミコ 「みんなと決めたんです。」

アミコ、机の上の焼けたセーラー服を触る。

トウサキ 「そうですか。」

アミコ 「これからも、ここで漬物作っていくんです。私たち。」

トウサキ 「そうですか。」

アミコ 「さよなら。」

トウサキ 「ありがとうございます。これはおいてきます。」

トウサキ、布にくるまれたものを渡す。

アミコ 「・・・重た・・・ってこれ？」

トウサキ 「きつと必要な時がきますよ。」

アミコ 「あの。」

トウサキ 「国境を超える分はもらっていきますから。・・・それじゃ。」

トウサキ、扉から去る。

アミコ、布を開らくと、金塊が現れる。

二階からポエムが顔を出す。

ポエム 「やっぱり・・・手伝いますよ。」

アミコ 「ああ・・・、いいのに。」

ポエム 「トウサキさん、ホントに行っちゃいましたね。」

アミコ 「うん。」

ポエム 「国境越えられるかな？」

アミコ 「大丈夫でしょ……。たぶん。・・・。」

ポエム 「そうですね」

アミコ 「あ、あれだね・・・お礼言ってなかったね。」

ポエム 「え？」

アミコ 「助けてもらったから。」

ポエム 「あ、そんな・・・あれですよ。ふがないと言うか・・・逆になんにもできなかったんで・・・その。」

アミコ 「ありがとう。」

ポエム 「いやいや・・・そんな・・・あれですよ・・・」

アミコ 「1パー。」

ポエム 「え？」

アミコ 「パーセント！」

アミコ、ポエムをおいて工場へと向かう。

アミコ 「やっちゃおうよ！さあ。」

ポエム、しばらくアミコの言った意味を考えている。

ポエム

「あ！上がったんだ。」

暗転。

BGM (

)

終わり。

上演を希望される場合は、左までご連絡ください

シアターTRIBE

hideo.nagataka@gmail.com